

三保通信

20.9.1

〒424-0401

(株) 三保製薬研究所
静岡市清水区中河内一五二三
☎054-396-3321

高度成長時代 (1955~73年の約20年と云われる) という言葉も、

「それ何のこと?」

と云われるのかもしれない。

花見久太郎は、この時代のド真ん中に居た。

「だから、マイナス成長なんてどこの話かねえって思ってたよ」

「高度成長」は何もかも変えた、マイナスなんて存在しないかの如く。

そして、「マイナス」に弱くなったのではないだろうか。

もう少し経済の話だが1990年代に入つて、経済収支はもうとつくとに低成長になっていた。成長というと、少しでもプラスがあるのかと思うわけだが、貯え(たくわえ)を取り崩して前年を維持するというわけで、実は年ごとにマイナス幅を広げ

つつあった。この時われらは対応できただろうか?

「ここでいっぺんに断食の話になるが断食中、生体は肝臓などに蓄えた脂肪分などを取り崩し」糧(かて)にして過ごす。

「えっ、プラスからマイナスしているの?」

花見氏[♂]逆転の発想!?[♂]の巻
マイナスなんてトンデモナイ?

花見だつて、

「そんなことできるのかねえ!!」

となるのだが、「プラス→マイナス→0」、この0が断食効果なのだ。

最近では、2016年の大隅良典東工大教授のノーベル生理学・医学賞受賞によって注目された。それは



「オートファジー(自食作用)研究」である。

細胞内の不要なタンパク質を分解して再利用する、という仕組みを観察したというものであった。

われわれも食を断てば、貯えを使つて間に合わせをするのだが、間に合わせることが自食作用ということで一時的に「マイナスして再生する」ことになる。

断食は再生のための療法なのだが、貯えが不要のレベルになると、これが悪さをするのである、病という症状になつて。

普段の備えとしては「腹八分病知らず」ということになる。

「腹八分が、マイナスの意味ということだね」しかし、

「それが出来るものなら苦労は無いよ」

これが花見世代か、マイナス効果を知る時代が来ているのだが、。まずは自分のからだで。(H)

小山内めぐみさんからのお便り

小山内さんも「少し過激になつて…」と仰るのですが、書かれている内海医師の、「下痢」の考え方の所など納得なのです。要は「からだに良く聴く」ということなのだと思います。小山内さんのお話、刺激的ですが考えさせられます。(H)

『三保通信』二〇二〇年七月一日号拝受。ありがとうございます。西先生の「腹の健康」、楽しみにしています。

最近、人から、内海聡(うつみさとる)という医者存在を知らされました。『医学不要論』(実に興味深い題名)を読んでみました。

ここに書かれてあることは、西式生活者には当然のことばかりで真新しい説もありませんが、これを現役医者が書いて現代医学批判をしているというところに非常に驚かされました。

内海氏は言います。

『なぜ人は健康を求めるのか』これについて、私には一つの提言がある。この世の医学者、治療家、セラピストをすべて敵に回す考え方である。それは、

「健康でないことこそが人間として当然である」という考え方である。人間は常に不調を感じ、愚痴をこぼし、その不調とつきあいながら自然に生き死んでいくものである。

これは医学不要論を提唱するうえで決して外せない概念だ。……

自分について考えても、私はいつも体の不調を感じている。

と思つたらそれを忘れていて、また思い出したように不調を感じる。理想的な健康体などというものはどこにもない。「常に何の不調もない状態が健康」という考え方自体が洗脳されているという事に気づかない。それが医療化を生み、医原病を生み、さらなる不健康をもたらす。

健康であるということは、体に何らの症状がないことだと考えている人が多いようだが、私に言わせればそれはおかしい。その症状はあなたのセンサーそのものであり、生きている証明そのものである。その症状を愛さねばならない。

例えば、あなたが下痢をしたとしよう。……下痢はバイ菌を外に押し出すための防御反応であり、それを止めると病状は長引いたり悪化したりする。……その症状は必然であるとし、その症状を大事にしながら脱水や体力低下に気をつけながら下痢が自然に収まるのを待つことが、実際は最も人体の治療にとって有効なのだ。

それを治そうとするからこそ、医学の奴隷になる。健康ばかり追い求めるからこそ、いろいろな商法が生



まれ、詐欺も発生する。』
全くその通りですね。だから、

「医学も医者も、本来生物には不要な産物であることを、あらためて思い起こしてほしい。」

と「おわりに」で結んでいます。

さらに、内海氏が引用していた浜六郎氏の『薬害はなぜなくなるらないか』も読んでみて、薬害を引き起こす現在の日本の想像を絶する医療を取り巻くひどい構造に愕然としました。

ここで、内科医の浜氏は、医者が普通に処方する鎮痛剤や解熱剤の害を説いています。

人間の体に傷ができると修理する反応として、皮膚が赤くなり、腫れて、熱を持ち、痛みが出る。

その後、傷口が黄色くなつて肉が盛り上がり、かさぶたが出来て、腫れが引いて、最後にかさぶたがはがれて治る。

この炎症反応に必要なのがプロス

タグランデインという物質だそうで、傷ができると、この物質が作られ、血管を広げて傷のある所に血液をたくさん補給できるようにするそうです。

痛みも、この物質が起こしている
そうで、危険信号を私たちに発しているということでしょうね。で、
医者が処方する鎮痛剤は、この物質の合成を抑えてしまうのだそうです。

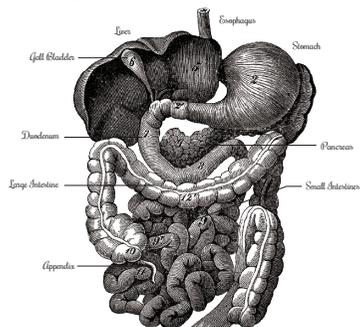
だから、痛みはとつても、炎症反応が弱くなり、傷の治りが遅くなり、細菌やウイルスと戦う力も抑えてしまう。
つまり、鎮痛剤・解熱剤は「抗炎症

作用が強いために、生体の有益な防御反応まで過剰に抑えて、得られる益より害のほうが大きくなる恐れがある」わけです。

コロナウイルスによる重症化も、医者が処方する解熱剤が原因ではないかと、私は思います。

腸と土

三保製薬研究所のなりたち
“自然療法の研究から生まれた医薬品”



The Intestines is the Source of Beauty and Health

三保製薬研究所
Miho Pharmaceutical Research Institute
<https://minus-chokaz.jp>

所詮、「経済的にうま味のある「薬」による利益を生む構造」を、現在の日本が抱えている限り、体に有害な薬の処方や薬害はなくなるらないでしょう。これは、医療分野に限らないかもしれません。

幸い、我々は西式を知っていて、スイマグを飲んで腸を整えれば、体の防御反応力が高まることを日々体感できています。いやあ、ありがたいことですね。

では、「愉快的排泄」とは何か、次号から改めて学ばせてもらいます。

小山内めぐみ

『土と腸』 近々発行!!

三保製薬研究所

